

アートマネジメント人材等海外派遣プログラム

2023年度実施報告書



目次

はじめに		03
事業概要	企画内容	04
	派遣先とプログラムの流れ	05
	応募状況	06
派遣先プログラム概況	スコットランド・エディンバラ	08
	REPORT 岡田 勇人	12
	高本 彩恵	14
	野村 善文	16
	松波 春奈	18
	タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク	20
	REPORT 丹治 夏希	24
	韓 成南	26
	ニューヨーク・ブロードウェイ	28
	REPORT 遠藤 七海	32
	春日 希	34
	高田 郁実	36
	目澤 美裕子	38
総括-今後に向けて		40

はじめに

東京都は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーの反映や、新型コロナウイルス感染症の影響、持続・共生社会へのシフト、デジタル化の進展など、社会環境が大きく変化しているタイミングを捉え、2030年度までの東京都の文化行政の方向性や重点的に取り組む施策を示した「東京文化戦略2030 ～芸術文化で躍動する都市東京を目指して～」を公表した。

東京文化戦略2030では、4つの戦略の1つ「国内外のアートシーンの中心として、世界を魅了する創造性を生み出す ～芸術文化のハブ機能を強化する～」において、東京の芸術文化の発信力を高め、将来的に世界から多くの芸術文化関係者、インバウンドを惹きつける都市となることを目指す「海外発信プロジェクト」を掲げており、アートマネジメント人材等海外派遣プログラムを、その中に位置付けている。

これまでも都は、創造活動に対する助成や、展覧会や公演など発表の場の提供を通じて若手アーティストを支援し、コロナ禍においても、渡航制限をはじめ多くの制約がある中で、デジタル技術を活用した発表の場・交流機会の確保など支援策を展開し、多くの才能を発掘してきた。こうした経験を活かしつつ、今後更に世界に通用する作品を生み出すとともに、その価値や芸術性をより広く届けていくためには、芸術文化を支える演出家やプロデューサー、キュレーター等のアートマネジメント人材の育成も欠かせない、こうした課題認識のもと、令和5年度から新たに本プログラムを開始した。

本プログラムは、①世界最先端の演出や舞台技術、作品や展示手法等に直に触れる、②第一線で活躍する海外の専門人材との人脈づくり、の2つの目的を柱として、海外の著名な芸術文化機関やシアター、芸術文化フェスティバルに概ね1週間程度派遣を行うものであるが、国内で活躍されている専門家からの協力を得ることで、派遣先の調整やキーパーソンとつないでいただくなど、個人では得難い有意な体験の提供を実現することが出来た。

今年度は、エディンバラ・フェスティバル、タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、ニューヨーク・ブロードウェイの3か国に10名を送り出したが、各々が獲得した知見やネットワークを被派遣者の中だけに留めるのではなく、共有・集積していくことで、未来の東京の芸術文化を牽引する、意欲溢れる若者たちの海外への挑戦を後押しするものになると考え、本報告書のとりまとめを行った。

本プログラムが、国際的な視点を持ったアートマネジメント人材等の育成に寄与し、東京から世界を魅了する作品を生み出し発信していく第一歩となれば幸いである。

事業概要

企画内容

主旨

- ・ 将来アーティストと社会をつなぐ役割を担う若手アートマネジメント人材を短期で芸術フェスティバル等に派遣し、国際的な活動の第一歩となるよう、海外の芸術文化関係者とのネットワークを作る機会を提供する。
- ・ 海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れることで、国際的な視点に立った創作の機運醸成を図る。
- ・ 将来的にはこの事業を通じて東京と各派遣先との連携を深め、東京と海外セクターとのネットワーク構築・強化に繋げる。

派遣対象者

連携する派遣先に準じて、対象となる芸術分野を選定。

- ★ 舞台芸術分野(演劇、舞踊、音楽等全般)に関わるプロデューサー、ディレクター、舞台技術者等
- ★ 視覚芸術分野に関わるディレクター、キュレーター等アートマネジメント人材

各分野ともに以下の条件に全て当てはまることとする。

- ・ 海外での公演や、海外セクターとの交流や共同制作などに興味があり、海外での実務経験がない・あるいは少ないこと
- ・ 芸術分野関連の現場経験が3年以上あること
- ・ 首都圏在住者で都内での活動を主とすること

プログラム

約1週間の滞在中のプログラムとして、主催者側で設定するベーシック・プログラムと、被派遣者自身が調整して設定するオリジナル・プログラムを設定。いずれも、派遣決定後に、主催者と協議しながら決定。

【ベーシック・プログラム】

主催者側で調整し設定するプログラム。現地での面会先や視察先を主催者側が調整。滞在期間中、必ず実施していただくプログラム。

【オリジナル・プログラム】

被派遣者が自らリサーチし、企画・調整するプログラム。派遣決定後、各自で事前に派遣先のリサーチを行い、また、関係各所視察・ヒアリング先を検討・調整して実施するプログラム。

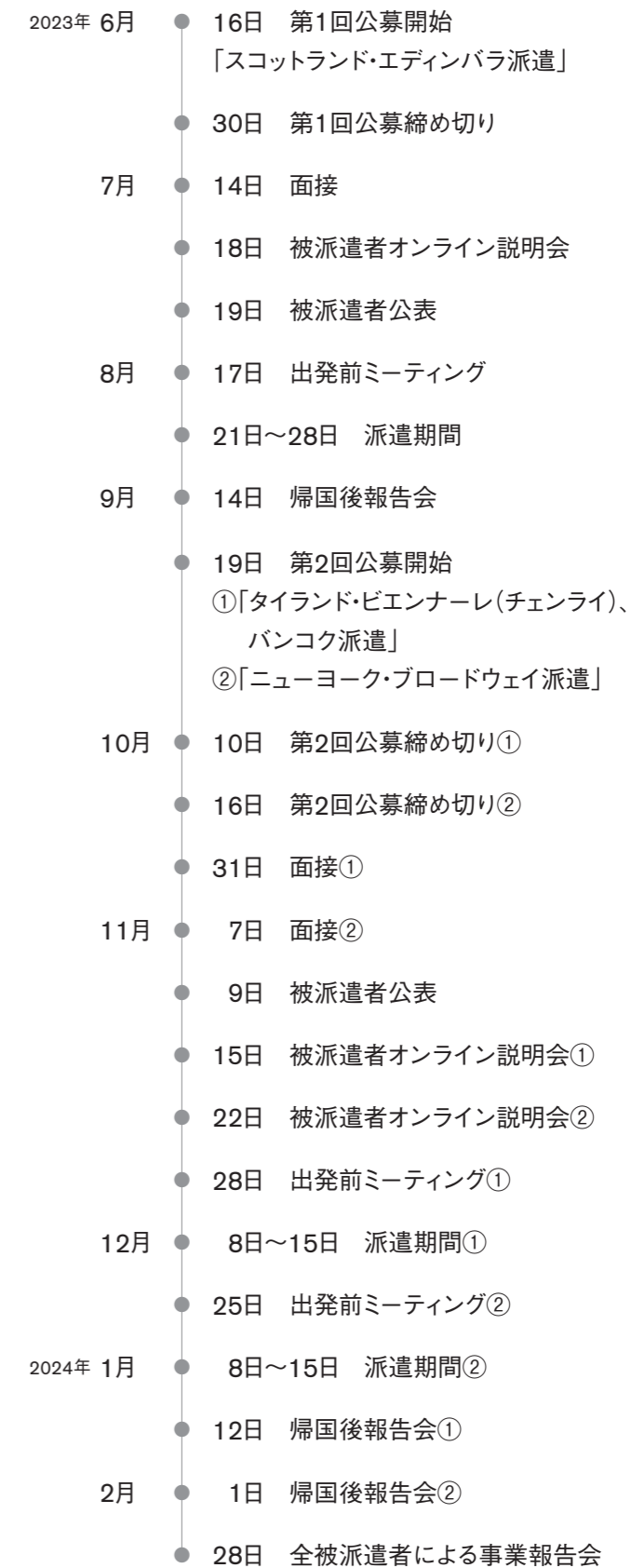
支援内容

- ・ 日本と派遣先の往復航空賃(エコノミークラス)
- ・ 現地宿泊費・日当
- ・ その他、派遣先でのスケジュール・プログラムの調整、現地での関係者の紹介、アドバイスのサポート

派遣先とプログラムの流れ

初年度ということもあり、派遣先としてバランスよくヨーロッパ、アジア、アメリカの各エリアで、かつ舞台芸術分野、美術分野の2分野を対象とするという条件の中で調整した。事業の立ち上げの都合上、夏以降の実施という選択肢の中で、関係者・アドバイザーのヒアリング・ご協力をいただきながら、舞台・総合芸術分野を対象にエディンバラ・フェスティバル、美術分野を対象としてアジアで開催されるタイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク、舞台芸術・エンターテインメント分野を対象にニューヨーク・ブロードウェイへの派遣を実施した。

4月以降に具体的な制度設計、運営体制・事務局の立ち上げとなり、広報・周知そして派遣準備の期間が短いタイトな実施スケジュールとなった。また、タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク派遣とニューヨーク・ブロードウェイ派遣については第2回として同時に公募を開始し、締め切りはニューヨーク分をやや遅らせることとした。



事業概要

応募状況

スコットランド・エディンバラ派遣に35名、タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク派遣に4名、ニューヨーク・ブロードウェイ派遣に49名の応募があり、今年度全体では延べ88名、平均年齢34.7歳となった。その中から、審査会(書類・面接)を経て、スコットランド・エディンバラ4名、タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク2名、ニューヨーク・ブロードウェイ4名の計10名を派遣対象者として決定した。

派遣先に準じ活動分野、職能(ディレクター、プロデューサー、キュレーターなど)を設定しての公募であったため、エディンバラ、ニューヨークは舞台芸術分野、タイには視覚芸術分野と、その条件に沿った活動分野からの応募が多く、比較的想定通りの結果であった。応募者の多くはフリーランスで仕事をしている方であったが、株式会社や財団などの組織に所属している方も少なくなかった。

一方、派遣対象者として、海外での活動経験があまりない若手を想定していたが、留学経験や語学力など、ある程度の海外経験を持つ応募者も多く、さらにステップアップを目指すきっかけとして応募しているケースが目立った。結果として海外経験や現場経験に基づき、現状に対する明確な問題意識や、派遣先で何を吸収したいと思っているのかなど目標設定がしっかりしている応募者が多かった。

応募者の属性(数字は人数)

—

スコットランド・エディンバラ
応募総数:35件、採択件数:4名

分類別	
演劇	21
舞踏	4
音楽	5
美術	4
その他	1

英語レベル

Beginner(初級)	12
Intermediate(中級)	15
Proficient(上級)	3
Fluent(堪能)	4
Native(ネイティブ)	1

年代別

50歳以上	3
40～49歳	9
35～39歳	6
30～34歳	9
25～30歳	7
24歳以下	1
平均年齢	36.2歳

職種別

プロデューサー・ディレクターが主	23
俳優・ダンサー等アーティストが主	3
その他(広報・団体職員・学生・リーガルアドバイザーなど)	9

タイランド・ビエンナーレ(チェンライ)、バンコク
応募総数:4件、採択件数:2名

分類別	
演劇	0
舞踏	0
音楽	0
美術	4
その他	0

英語レベル

Beginner(初級)	0
Intermediate(中級)	0
Proficient(上級)	3
Fluent(堪能)	1
Native(ネイティブ)	0

年代別

50歳以上	1
40～49歳	1
35～39歳	0
30～34歳	1
25～30歳	1
24歳以下	0
平均年齢	38.2歳

職種別

プロデューサー・ディレクターが主	3
俳優・ダンサー等アーティストが主	1
その他(広報・団体職員・学生・リーガルアドバイザーなど)	0

ニューヨーク・ブロードウェイ
応募総数:49件、採択件数:4名

分類別	
演劇	27
舞踏	7
音楽	9
美術	3
その他	3

英語レベル

Beginner(初級)	20
Intermediate(中級)	17
Proficient(上級)	5
Fluent(堪能)	7
Native(ネイティブ)	0

年代別

50歳以上	4
40～49歳	5
35～39歳	11
30～34歳	9
25～30歳	13
24歳以下	7
平均年齢	33.3歳

職種別

プロデューサー・ディレクターが主	26
俳優・ダンサー等アーティストが主	15
その他(広報・団体職員・学生・リーガルアドバイザーなど)	8

派遣先プログラム概況

スコットランド エディンバラ



派遣先概要



エディンバラ国際フェスティバル(英:Edinburgh International Festival)は、スコットランドのエディンバラで開かれるパフォーミングアーツの祭典。8月から9月にかけて3週間にわたって開催され、オペラ、演劇、音楽(特にクラシック音楽)、ダンスなどの分野の世界一流のアーティストが公演を行う。期間中は、エディンバラ城内でミリタリー・タトゥー(軍楽隊の分列行進のショー)が毎夜催され、街中のいたるところで大道芸人がパフォーマンスを繰り広げるなど、荘重な古都エディンバラが華やかな祭りの雰囲気包まれる。

【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踊、音楽等全般)に関わる若手を中心とするプロデューサー、ディレクター等

【主旨・目的】

8月にスコットランド・エディンバラで開催されるエディンバラ・フェスティバルの視察を中心に、演劇や音楽関係者とのミーティングや関連施設の視察を行う。

【派遣期間】

2023年8月21日～8月28日まで

プログラム・アドバイザー

須藤 千佳

ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

国際基督教大学卒業後、メーカー勤務を経て2001年に渡英。ロンドン大学大学院にて修士号を取得。2005年より英国の公的な文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルで15年以上に渡ってアートを通じた日英間の文化交流プログラムに従事。近年では特にアートと社会課題(障害や高齢社会、孤立等)をテーマにしたプロジェクトを英国のアート機関および日本の美術館や劇場、ホール、オーケストラ、自治体、NPO等とともに展開し、日英間の文化関係者の交流、協働を推進している。2022年より現職。



ベーシック・プログラム

エディンバラ・フェスティバルの全体像についての理解を促進することを目的として、ブリティッシュ・カウンシル・スコットランド及びクリエイティブ・スコットランドとの面会を実施。また、エディンバラ・フェスティバル・フリンジの運営や地域社会との連携への理解を深めることを目的として、フェスティバル・フリンジ・ソサエティへのヒアリングも合わせて行う。さらに、必ず観劇する2作品を設定。



エディンバラ・フェスティバル・フリンジ・ソサエティへのヒアリング



観劇作品FOOD会場にて

ヒアリング

ブリティッシュ・カウンシル・スコットランド
(ヘッドオブアーツ)

クリエイティブ・スコットランド

(マルチ・アートフォーム・マネージャー)

【ヒアリング項目】

エディンバラ・フェスティバルの成り立ち・歴史と現在の運営・管理状況や最近の動向(来場者数、国内外来場者の割合、作品・テーマの傾向など)。国内外から多くのクリエイターが集まる拠点としての位置づけをどのように実現したか。地域のアート教育、アウトリーチプログラムとこれまでの成果について。英国／スコットランドにおけるクリエイティブ産業の労働環境について。具体的な改善策(調査、研修など)。

エディンバラ・フェスティバル・フリンジ・ソサエティ
(副事務局長)

【ヒアリング項目】

フリンジ・フェスティバルの地域社会への影響と役割(フリンジ・フェスティバルと地域社会がどのように発展してきたか)フリンジ・フェスティバルの運営と管理、そして世界中からアーティストと観客を惹きつける方法と理由。

観劇作品

FOOD、Life is a Dream



岡田 勇人
フリンジ・オーガナイザー

横浜国立大学教育人間科学部卒業、東京大学大学院学際情報学府中退。2017年から演劇ユニット・オフィスマウンテンで俳優として活動。2022年から特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センターに勤務。YPAM-横浜国際舞台芸術ミーティングのフリンジプログラムのマネージ、YPAMフリンジセンターの営業を担当している。

オリジナル・プログラム

様々なネットワーキングイベントを視察

CINARS主催の今後の国際共同制作に関するパネルディスカッションや、各地域によるピッチ・セッションに参加した。後者では、各アーティストが10分ほどで自分の作品をプレゼン。フリンジのプログラム数は膨大なため、関係者向けショーケースとして自国や地域のアーティストを紹介する。

エディンバラ・フェスティバル・フリンジの会場視察

膨大なプログラムが街中で展開されている中で、各会場を比較しチケット販売の方法や扱う作品の特色(実験的な作品が多いなど)を調べた。

フリンジ作品を視察

いわゆる「実験的」と言われる作品を比較的多く観た。例えば、女性のパフォーマーたちによるフェミニズムの観点を持ちつつも突き抜けたコメディ作品Lucy and Friends, Horizon Showcase: Little Wimminなど。



Performing Arts Made in Germanyピッチセッションの様子

印象に残ったプログラム

“Lucy and Friends”の観劇

エディンバラ・フェスティバル・フリンジで8月23日に観たLucy McCormickによる“medium-concept catastrophic show”(!!)キュレーティブで知的なフェスティバルとは真逆の“なんでもあり”のフリンジ・フェスティバルの中で、ひときわ破壊的で破廉恥で無茶苦茶でありながら、真摯にパフォーマンスとは何かを考えさせられた作品。こういう作品に遭遇してしまうのがフリンジ・フェスティバルの醍醐味か!と実感した。



会場に併設されたバーで観劇前や後の人々が集まっている様子

参加して

YPAMフリンジ担当であるが、そもそも舞台芸術界隈で「フリンジ」って便利に使われている言葉だけでも…、一体どんなもんなんじゃ?と思っていた。そこで、エディンバラである。ぶったまげ!大カオス!カオスでありながら、無数のプロフェッショナルやアーティストが国際的に活動するための仕組みが作られている。今回の派遣事業では、多くのプログラムを鑑賞してフェスティバルとしてのフリンジの面白さ・過激さを体感できたのに加えて、運営側のエジンバラ・フリンジ・ソサエティの方や、各国から参加しているフェスティバル関係者から直接お話を伺うことができた。貴重な機会を与えていただきありがとうございました。



Lucy and Friends の会場の様子



高本 彩恵
制作、アートマネージャー

早稲田大学文化構想学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科演劇映像学コース修士課程在学中。劇団あはひに所属し制作業務を担当するほか、小～中劇場の企画運営・制作助手等を担当。制作者としての活動の傍ら、大学院にてアートマネジメント分野を研究している。

オリジナル・プログラム

業界関係者の ネットワーキングイベントに参加

コーヒーを飲みながらフランクに自己紹介し、その後各自話したい人にアプローチする。プロデューサーだけでなく、振付家、パフォーマー、他国のカウンシルの方など各々が明確な目的をもって参加していた。

FRINGE・ソサエティによる サポートを視察

今後エディンバラ・フェスティバルでショーをおこなうためにどうしたらよいか、どういったサポートが受けられるかといった内容の1時間程度のトークに参加。参加する具体的な目標・目的はなにか？そのために最適な参加の仕方、プロジェクト設定を軸に、多様なアプローチ/メリット・リスクが提示された。

Playwright's Studio Scotlandに参加

劇場がアーティストの仕事に関して話し合う場を設けており参加した。今回は、美術デザイナーさんの話を聞き、スタッフワークの視点からアーティストの仕事について考えるというもの。多様な分野や肩書きの参加者が集い、課題をディスカッション形式で考え、スタッフやクリエイターと、作品の軸、予算などの縛りの中で、何を大事にして舞台を立ち上げていくのかといった視点での会話がなされた。

印象に残ったプログラム

アートマネジメントも クリエイティブに

ブリティッシュ・カウンシル・スコットランドとクリエイティブ・スコットランドへのヒアリングで印象的だったのは、「収入を拡大させることは難しいが、いつだって観客は拡大できる。創造性は舞台上だけでなく、マーケティングの中にもある」という考え方。インフルエンサーを巻き込んだ宣伝方法や国内外から訪れる観客への具体的なサポートに関するお話から、視野を広く持ち、時代に応じた創造的なアプローチを模索し、実践することの重要性を感じた。自身は制作者としてさらに作品やアーティストに近いポジションで活動している。既成の方法に縛られず新たなアプローチやクリエイティブな発想で、今後の制作業務・方法をアップデートしていきたい。

参加して

エディンバラ・フェスティバルでは、上演団体それぞれが目標・ターゲットを設定し、その目的に応じた上演方法や観客へのアプローチを実践しており、またそれを後押しする制作的なサポートがなされているという印象を受けた。さらに異なる国や芸術ジャンルのアーティストが集まり、フラットに意見交換を行うような場が多く、彼らを通して自身の活動や活動拠点である「日本」の文化特性が見えてくるような経験は非常に貴重であった。

今後、自身が制作者として作品に関わる際には、まず上演団体やアーティストが自らの目的や国内外での位置づけを整理・言語化する場を作ることから始めたい。その上で公演の目的を明確にし、観客へのアプローチや制作手法を「創造性をもって」実践することを意識していきたい。



Playwright's Studioが開催された
Lyceum studioにて



ブリティッシュ・カウンシル・スコットランドのオフィスにて



野村 善文
舞台美術

公益財団法人クマ財団の事務局長として若手クリエイターの支援と育英に注力する傍ら、大学で学んだ舞台美術のフリンジ・フェスティバルの活動歴に『弱法師』(SPAC・静岡県舞台美術センター/2022)や『東京ノート・インターナショナルバージョン』(第0回豊岡演劇祭/2020)などがある。

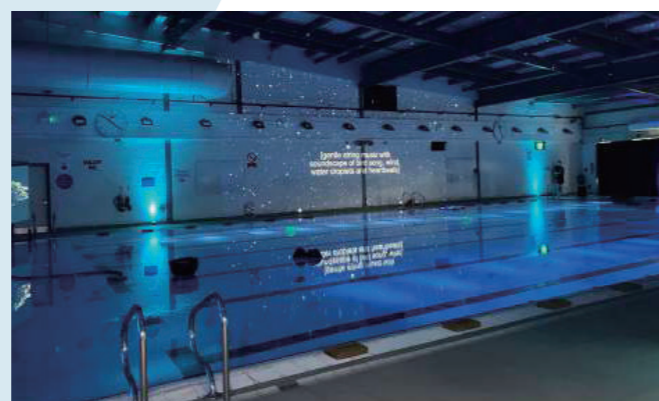
オリジナル・プログラム

業界関係者としての登録と情報収集

Arts Industry Officeにて、フリンジ・フェスティバルが業界関係者を対象に発行するArts Industry Passを事前登録して受け取った。Arts Industry Passを所持した人々がバイヤーとして積極的に参加することでフリンジ・フェスティバルのマーケットとしての側面が機能している。

作品を数多く鑑賞

Summer Hall劇場の中庭に設置した仮設の黒いブースを舞台に、同じ時間に予約をした他の観客と別々の扉からそれぞれの個室入り、ペアで楽しむWITHOUT SINという作品、1対1の電話で行われる15分間のパフォーマンス作品An alternative Helpline for the end of the World、プールを舞台に行われる没入型作品BODIESなど、ネットワーキングイベントなどで現地の関係者に積極的にヒアリングし、劇場外で行われる実験的な作品も多く観た。

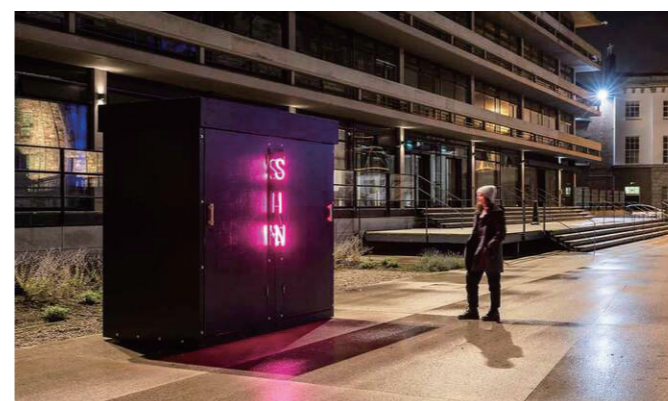


BODIESの会場であるエジンバラ郊外の学校のプールの様子

印象に残ったプログラム

戦略的なインフルエンサーマーケティング

ブリティッシュ・カウンシル・スコットランドと、クリエイティブ・スコットランドでのヒアリングで、フェスティバルの持続可能な運営に関する多角的な議論が行われた。話題は集客、観光、ファンドレイジング、広報など広範囲に渡ったが、特に印象に残ったのはインフルエンサーマーケティングの取り組みであった。インフルエンサーマーケティングの捉え方として、単に広報を外部に委託するだけでなく、より深い関係性の構築のきっかけと捉えている点が印象深かった。具体的には、インフルエンサーマーケティングを単なる宣伝ツールとしてではなく、演劇批評について学べるラーニングプログラムと組み合わせることで、一時的な取引ではなく、参加者との持続的な関係性を築く取り組みとしての実績についてヒアリングできた。このアプローチは、文化的価値を高めると同時に、新規オーディエンスの獲得を可能にする有効な手段であると感じた。



Without Sinの会場として設置されたブース Photo Blathnaid Conroy

参加して

エディンバラのフリンジ・フェスティバルにて感じた街の熱気やその盛り上がりは、単なるテキストや映像といった二次情報では決して伝わらない独特のものであり、現地で直接体験することのみ得られる非常に刺激的な体験であることを痛感した。この視察を通じて明らかになった課題もまた、無視できないものである。例えば一都市における文化事業としての地元コミュニティやスポンサーとの関係性の作り方や、文化的多様性を尊重しながら新しい観客層を引き込む戦略などの挑戦は老舗のプログラムとしての保守的な一面もありながら、生き残るための挑戦的な視座を強く感じ、今後の自身の活動において、このバランスを見極めながら、どのようにして文化事業としての盛り上がりを作ることができるかを考えるきっかけとなった。



Culture Irelandのネットワーキングイベントの様子



松波 春奈
公益法人職員、NPO法人職員

桜美林大学にてパフォーマンスアーツを専攻し、卒業後ダンスカンパニーのアシスタントプロデューサーとして、海外・国内ツアーを企画・同行。同時に東京圏でのフェスティバル運営に携わる。2022年より舞台芸術制作者オープンネットワーク、全国公立文化施設協会の事務局として従事。

オリジナル・プログラム

FRINGE 作品を多く視察

元々の専門分野がコンテンポラリー・ダンスなのでダンスまたはサーカス作品、また、アジアのアーティストの演目をできるだけ多く鑑賞した。世界的なフェスティバルであるがゆえ、作品を通して各国の持つ課題や問題意識及び各地域の現代アート・実演芸術の捉えられ方の違いが見えてきた。

Fringe Fairを視察

関係団体や他フェスティバルによるブース出展を視察。大道芸人らも対象とするパフォーマー向けの労働組合や、プロデューサーを支援している団体、パフォーマーのみならずプロデューサーや技術スタッフ等も登録・活用可能LinkedInの舞台芸術関係者版、障がいのあるパフォーマーを支援している団体などを新しく知る機会となった。

近隣都市グラスゴーを視察

トラムの車庫だった場所を改築してスタジオ、ギャラリー、カフェが併設されているグラスゴーのTramwayを視察。現代美術と実演芸術を主に展示・上演している。



トラムの車庫だった場所を改築した Tramway

印象に残ったプログラム

劇場による アーティスト紹介プログラム

Summer hallという地元の劇場とフェスティバル事務局による、主にスコットランドを拠点に活動するアーティストの紹介プログラムが印象に残った。開催時間は1時間で、5組のアーティストが、台本を持ちながらシーンの一部を切り取った芝居や、衣装を身につけずに完成途中のパフォーマンスを展開していく。未完成ではあるが活動の機会を探している若手のアーティストに、劇場側が実験的な場を設けていることに感銘を受けた。

参加して

世界最大級のFRINGE・フェスティバルに参加できたことは、各国から集まる関係者と作品に出会えたという点でとても有意義であった。自国の作品を見もらう為に広告を出し、アーティストを支援している各国の組織や現地の劇場の取り組みは画期的だと感じた。関連機関とのミーティングにおいては、ミッションに基づいた支援策や事業が展開されており、文化芸術の振興をそれぞれの立場で捉えていることが感じられた。今回の経験をふまえ、各組織がどんなミッションを持ち、事業を展開していくべきか意見交換の機会を設けたいと考えた。まずは所属組織のミッションは何か、そこに基づく事業展開が出来ているかを問い直していきたい。



Summer Hall 劇場

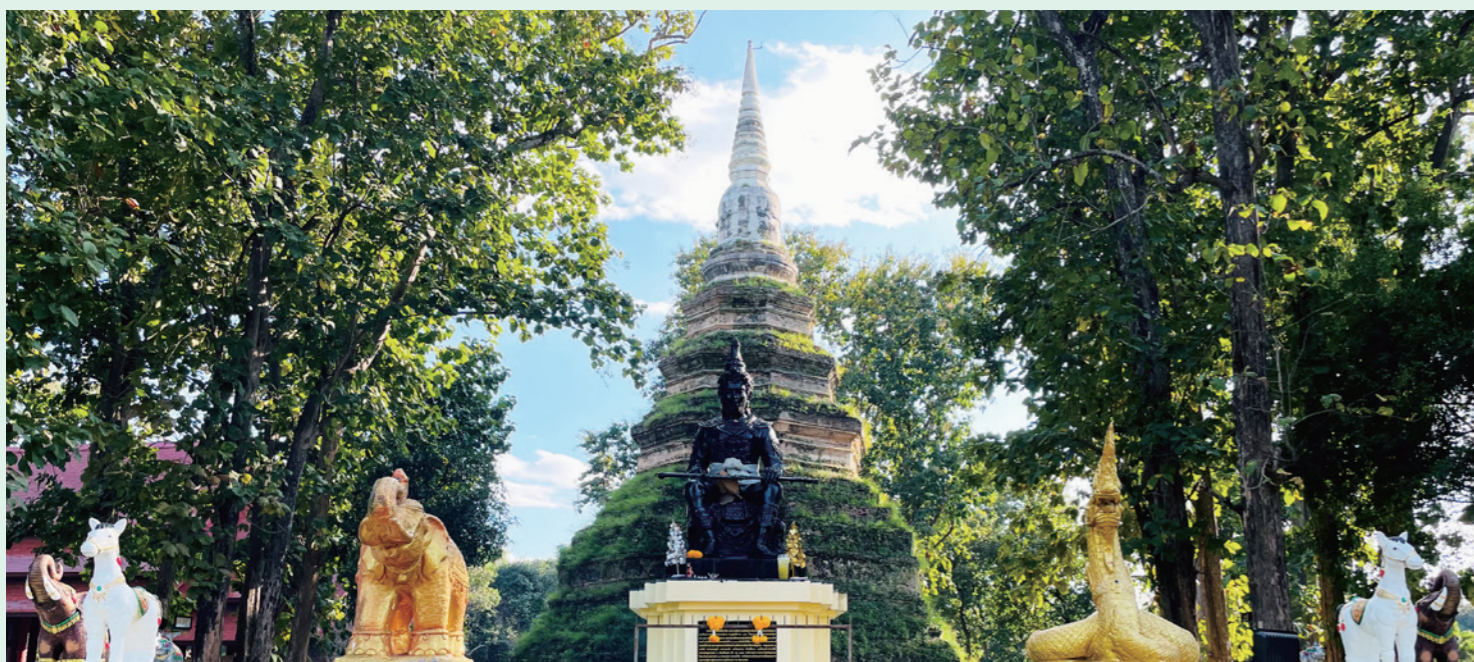
派遣先プログラム概況

タイランド ビエンナーレ、バンコク

(チェンライ)



派遣先概要



タイランド・ビエンナーレは、タイ各地を移動しながら隔年で開催される国際的な現代芸術祭で、2018年に南部のクラビ、2021年に東北部のコーラトで開催され、第3回となる今回は最北部のチェンライで2023年12月から開催。

【派遣対象】

視覚芸術に関わる若手を中心とするキュレーター、ディレクター、アートプロフェッショナル等

【主旨・目的】

12月9日に開幕するタイランド・ビエンナーレ2023に合わせて派遣。今回のテーマは「オープンワールド」。多様な文化と豊かな歴史を持つ古代都市を舞台に芸術を通じて地球規模の課題に関与するとともに、ビエンナーレに集う各国のアーティストとのネットワークづくりの機会とする。その他、バンコクでの視察も実施。

【派遣期間】

2023年12月8日～12月15日

プログラム・アドバイザー

片岡 真実
森美術館館長

ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館、2020年より現職。2023年4月より国立アトリサーチセンター長を兼務。ハイワード・ギャラリー（ロンドン）インターナショナル・キュレーター（2007～2009年）、第9回光州ビエンナーレ共同芸術監督（2012年）、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）、国際芸術祭「あいち2022」芸術監督（2022年）。CIMAM（国際美術館会議）では2014～2022年に理事（2020～2022年に会長）を歴任。



Photo: Ito Akinori

ベーシック・プログラム

タイランド・ビエンナーレのオープニングデイから数日間、主催者オーガナイズのレセプションや関係者向けのツアーに参加し、アート関係者とのネットワークングを実施。また、国際交流基金バンコク事務所では、タイ（主にバンコク）のアートシーンについてや、タイランド・ビエンナーレを含めその他のアートフェスティバルに関するヒアリングなどを行い、フェスティバルシーンに関する体制の理解促進を図る。

視察先

タイランド・ビエンナーレ2023（チェンライ）

【内容】

オープニングデイから数日間の関係者及びプレス向けツアーに同行。アーティストック・ディレクターのリルクリット・ティラヴァーニャとグリッティヤ・ガウエウオンが主導し、チェンライの広大なエリアにまたがる17会場（50組以上のアーティストが参加）を4日間かけて巡る。各会場ではアーティストと直接会話をし、ツアーに参加する各国のアーティスト、ビエンナーレ主催者とのネットワークングを行う。

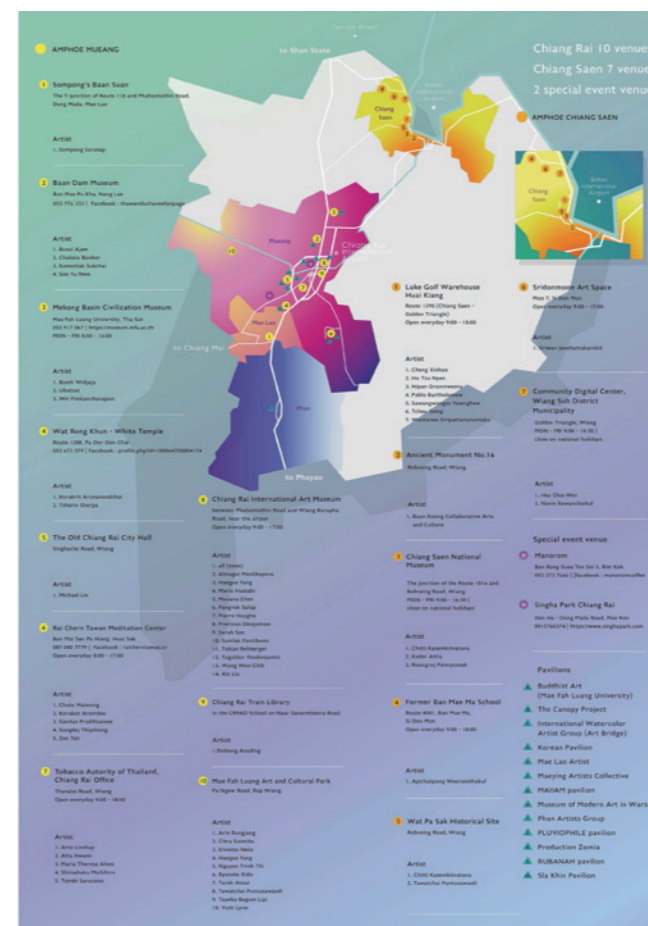
ヒアリング先

国際交流基金バンコク日本文化センター

（文化芸術交流部長）

【ヒアリング項目】

タイ（主にバンコク）のアートシーンについてヒアリング。芸術祭に関してはタイ国政府が主導するタイランド・ビエンナーレと民間が主導するバンコク・アート・ビエンナーレの違いとそのバランス。バンコク市内及び近郊における美術館、近年その数が拡大している現代アートギャラリーやアートセンターなどについて。またバンコクにおける国際交流基金が行っているサポートについて。



Thailand Biennale 2023 Venues and Artists



丹治 夏希
プロジェクトコーディネーター、ディレクター
早稲田大学国際教養学部卒業。在学中
モントリオール大学(カナダ)に留学。卒
業後、株式会社アートフロントギャラリー
にて「瀬戸内国際芸術祭」「瀬戸内アジア
フォーラム」「いちばらアート×ミックス」を
はじめとする地域型芸術祭のコーディネ
ーターおよび海外渉外担当を務める。近年は
アジアの現代アートに関心を持つ。

オリジナル・プログラム

ビエンナーレ参加アーティストの トークを視察

シラパコーン大学にて、タイランド・ビエンナーレ
の出品作家であるYang Haegue、Sakarin Krue-
on等が登壇し、作品の記憶がフレッシュな状態で
貴重な制作話などを聞くことが出来た。

BAB2024 キュレーターにヒアリング

バンコク・アート・ビエンナーレ2024のキュレー
ターPojai Akratanakulと面会しビエンナーレの
制作現場の話や、芸術祭としてタイランド・ビエン
ナーレ、瀬戸内芸術祭との比較についてディス
カッションした。

バンコク市内に数多く存在する アートスペースやギャラリーを視察

ジム・トンプソン・アート・センター、アートセンター・
シラパコーン大学、Noble PLAY、100 Tonson、
Nova contemporary、TCDC、Warehouse30、
ATTA等



バンコク市内にはアート関連施設が多く点在する

印象に残ったプログラム

タイの風土を感じる 作品とパフォーマンス

一つに絞るのは難しいが、特に忘れられないのが
チェンセーンのゴールドトライアングルの川岸に
設置されたナウィン・ラワンチャイクン作品のオープ
ニングイベントである。ラオスやミャンマーとの国
境を接する複雑なバックグラウンドを持つ場所で、
そうした地域へのリサーチを下敷きにしながらも誰
もが楽しめるパブリックアートであること、パフォー
マンスや食べ物の屋台からタイ北部の文化を垣間
見ることができたこと、ビエンナーレに関係のない
観光客も入り混じってお祭り騒ぎだったことから、
開かれた芸術祭とはこうあるべきではないかと思わ
せるような解放感にあふれたイベントだった。

参加して

タイに渡航する直前、不安と期待でいっぱいだった。
海外の関係者と何度も仕事はしてきたが、いつ
も日本を案内する側で、自分が足を運ぶのは初め
てだったからだ。ビエンナーレについてリサーチし
たい、アーティストたちに会いたいという目的はも
ちろんあったが、未知のフィールドに飛び込みたい
というのがいちばん大きな動機だったように思う。
いざ行ってみると、作品はもちろんタイという土地
に圧倒され、刺激に満ちていて、アジア圏でアート
プロジェクトを行うことや今後の関わり方につい
て改めて考えさせられた。まだまだ若輩な私の話を
熱心に聞いてくれたり、インタビューに応じてくれた
り、快く案内してくれた(面倒をみてくれた)方々には
感謝してもしきれない。今回のプログラムは視野
を大きく広げてもらえる貴重な経験となった。



チェンセーンでのオープニングイベントにて



韓 成南
ディレクター、キュレーター、映像作家、演出家
Interdisciplinary Art Festival Tokyo (IAFT)、
Art in Country of Tokyo (AICOT)、
Interdisciplinary Art Project Kobe (IAPK)
代表

オリジナル・プログラム

BAB2022 参加アーティストと面会

バンコク・アート・ビエンナーレ2022参加作家であるNUTDANAI JITBUNJONGや、Uninspired by Current Events (Gan)と面会。それぞれの作品内容、背景をヒアリングしながらディスカッションを行った。

BAB2022 キュレーターにヒアリング

バンコク・アート・ビエンナーレ2022でキュレーションをしていたGallery VERのディレクターJirat Ratthawongjirakul と面会。ビエンナーレの制作現場の話などをしながら、Gallery VERとCartel Artspaceなどギャラリーの視察を行った。

バンコク市内に数多く存在する アートスペースやギャラリーを視察

100トンソン・ギャラリー、MOCA、Warehouse30、The Jam Factory、Bangkok Art and Culture Centre (BACC)等

グローバルに活躍する アーティスト等と面会

シカゴ美大出身の映画監督JAKRAWAL NILTHAMRONGや、瀬戸内国際芸術祭2019にも参加していたPinaree Sanpitakさんなど、グローバルに活躍する方々と面会、ヒアリングを行った。

印象に残ったプログラム

歴史と文化が生み出す 多様な作品に触れる

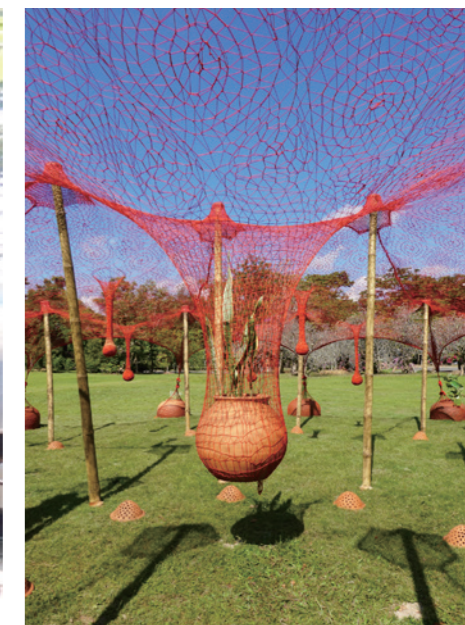
4日目の独自視察プログラムと公式キュレトリアルツアーを組み合わせた日が、流れも含めて変化に富み、大変充実した。午前中にブルー・templ、チェンライ国際美術館、カレン首長族村、チュイフォン ティー・プランテーションを訪問し、午後は、チェンセン国立博物館、ワット・パーサク、チャン倉庫、ゴールデン・トライアングル、バーンマエマ学校、ウィアン・デジタル・コミュニティ・センターと各所でのオープニング・パーティーといった内容である。チェンライからチェンセンにかけて巡りながら、多種多様なアート作品と地域の歴史とカルチャーに触れられる華やかな経験ができた1日となった。

参加して

タイランド・ビエンナーレの最大の特徴は、開催都市を毎回変更することである。その理由は、芸術祭に観光客を誘致し、地域観光の発展に寄与することが目的である。それに付随するアート施設の建設等、国が主体となる芸術祭だからこそ執り行えることだと感じた。今後10年以上継続的に行えば、欧米を含めた国内外で注目される芸術祭になることは確実で、エネルギーな息吹を感じた。バンコクでは、レジスタント精神のある90年代生まれの作家と会い、彼らの作品を通じてその「雰囲気」を掴むことができた。本派遣プログラムに参加したからこそ再会した方々や新しく出会った方々もあり、自身の活動にすぐ反映できそうなので大変感謝している。



[What's Not, 2023]Chakaia Booker



[Chantdance, 2023]Ernesto Neto

派遣先プログラム概況

ニューヨーク ブロードウェイ



派遣先概要



ニューヨーク市マンハッタン区にあるブロードウェイ周辺の劇場。ロンドンのウェスト・エンド・シアターと並び、世界でも最高水準といわれる。大多数の上演作品はミュージカルで、ニューヨークがアメリカの文化の中心となる一助となっている。

【派遣対象】

舞台芸術(演劇、舞踊、音楽等全般)に関わる若手を中心とするプロデューサー、ディレクター、技術者、演者等

【主旨・目的】

世界で最も熱いエンターテインメントの中心地ニューヨークで、「エンターテインメントビジネス」の魅力を、人々の生活・文化やブロードウェイ最先端のミュージカル等様々な観点から感じとり学ぶ機会とする。滞在中は、ミュージカル鑑賞、美術館訪問、街の探索、ブロードウェイミュージカルのバックステージツアーや現地で活躍するプロデューサーやアーティストとのディスカッション・交流などを通じて、本場のエンターテインメントビジネスの、日本には無い発想や規模の大きさに触れる機会を提供する。

【派遣期間】

2024年1月8日～1月15日

プログラム・アドバイザー

松田 誠
演劇プロデューサー

俳優活動を経て1994年に株式会社ネルケプランニングを設立。日本のアニメ、マンガ、ゲーム作品を舞台化した”2.5次元ミュージカル”というジャンルを確立したパイオニアである。数々の有名作品をプロデュースし大ヒットさせ、アジア、ヨーロッパ、アメリカなど海外公演を成功させた。近年は舞台の他に映像作品や音楽など様々なエンターテインメントのプロデュースを手掛けている。

舞台化をプロデュースした主な原作作品

『美少女戦士セーラームーン』『NARUTO』『進撃の巨人』『テニスの王子様』『刀剣乱舞』『黒執事』『BLEACH』など



ベーシック・プログラム

ブロードウェイの全体像についての理解を促進することを目的として、現地の第一線で活躍する多方面の業界関係者との面会を実施。制作プロセスに関わる関係者はもちろんのこと、各被派遣者の興味関心に沿って、ブロードウェイの労働環境や制度、チケットのビジネス面・システム面での運用からトラディショナルメディア・デジタルメディアを駆使した広報・マーケティングまで、多角的なヒアリングを行い、エンターテインメントビジネスの魅力とスケールを感じ取る機会とした。さらに、必ず観劇する5作品を設定。



ジュニパーストリートプロダクションズにてヒアリングの様子



ミュージアムオブブロードウェイにて

ヒアリング先

ミュージアム・オブ・ブロードウェイ
(ファウンダー／プロデューサー)
ジュニパーストリートプロダクションズ
(制作責任者)

Broadway.com
(共同CEO)

シチュエーション・インタラクティブ
(デジタルマーケティング担当)

ブロードウェイ・リーグ
(マーケティング・ディレクター、CMO)

ゴージャス・エンターテインメント
(プロデューサー)

その他、作詞作曲家、衣装デザイナー、セットデザイナー、音楽監督、ハミルトン振付師

【ヒアリング項目】

制作過程の各段階に携わるプロセスについて、ブロードウェイの労働環境や制度、チケットビジネス仕組み、業界団体の役割、伝統的メディアとデジタルメディアを含む広報・マーケティング戦略など

視察先

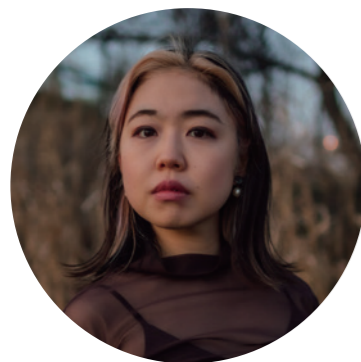
ミュージアム・オブ・ブロードウェイ、オープン・ジャー・スタジオ、フォーサイト・シアトリカル オフィス、ザ・ジョン・ゴア・オーガニゼーションズ、ブロードウェイ・リーグ等

アレンジ協力

ゴージャス・エンターテインメント

観劇作品

SIX the Musical、Moulin Rouge、MJ the Musical、Hamilton、Sleep No More



遠藤 七海
制作者、アーティスト、ダンサー

立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。幼少期よりダンスを始め、中高時代で演劇、大学時代でコンテンポラリーダンスに出会う。大学卒業後は、自身のパフォーマンスや創作活動と並行して、現代演劇を中心に制作にも携わる。最近では「食」と「ダンス」をテーマに、パフォーマンスやコミュニティ開拓を模索している。

オリジナル・プログラム

“How to Dance in Ohio”鑑賞

2015年に制作されたドキュメンタリー映画をブロードウェイミュージカル化し、自閉症を公表している俳優が自閉症の当事者を演じている“How to Dance in Ohio”鑑賞。アクセシビリティに配慮した会場運営を見る機会にもなった。

アメリカの舞台業界について ヒアリング

ブロードウェイでダンサー・ステージマネジャーとして活動する日本人と面会。アメリカには若手育成の機会が多く用意されていること、オーディションがオープンになっていることなど、アメリカと日本の舞台業界の違いについて話を聞いた。

Under The Rader Festival シンポジウムに参加

NYで毎年行われる演劇フェスティバルUnder The Rader Festivalのシンポジウムに参加。トークイベントが開催され、会場には各国から多くのプロデューサーやフェスティバルマネージャーが集まり、ネットワーキングの場となっていた。

印象に残ったプログラム

“How to Dance in Ohio”鑑賞

どれも印象深く、それぞれ自分にとって非常に意義のあることだったが、1つだけ選ぶとすれば“How to Dance in Ohio”。自閉症グループを追ったドキュメンタリー映画のブロードウェイミュージカル版で、自閉症当事者を演じている俳優もアンダーキャスト(代役)を含めて全員自閉症を公表している。それに伴い、稽古場や上演環境の配慮やウェブサイト等広報面での文脈化がなされており、エンターテインメントビジネスにおいても、作品を通して業界に新たな道を切り開いていく、社会を変えていく、という意味と希望が感じられた。

参加して

ブロードウェイを中心としたエンタメと実験的なアートという異なる文化が共存し、多様性に富んだNYの文化体系及び状況を知ること、日本の芸術文化における諸問題解決への糸口や若手アーティストの海外進出のヒントを得たいと思い応募した。現地では多分野、多視点で話を聞くことができ、広い視野を持ってNYの文化を捉えられた。また、言葉や文化が違う土地でだからこそ体感した感覚や意識(言語/人種/ジェンダーの意識)、思考(ビジネス的な観点)も大きな財産になると感じている。この経験は個人的にも広く共有していきたいと思っている。今後は今回生まれた繋がりや経験を糧にして、国内外で広い視野を持って活動していきたい。



How to Dance in Ohio会場にて



Under The Rader Festivalシンポジウム会場の様子



春日 希
俳優

幼少期からミュージカルに出演。大学在学中New Yorkへ留学し本場のミュージカルを研究。卒業後はフリーの俳優として日本オリジナルミュージカル等で主演を務める。自主公演企画、MC、舞台関係の通訳としても活動。近年はフェミニズム、メンタルヘルス、気候変動等に興味を持ち、SNSを通してそれらを含む様々なトピックについて発信している。

オリジナル・プログラム

Broadway Green Allianceを訪問

ブロードウェイにおける気候変動対策への取り組みについて知るため、業界全体で演劇と持続可能性を結ぶ役割を担う非営利団体Broadway Green Allianceのオフィスを訪問し、業界全体とその後援者たちが、より環境負荷を減らすために行動することを促すために行っている活動内容について話を聞いた。

DEI(多様性、公平性、包括性)の保たれたコミュニティづくり

自身も演出家、振付家であり、教育者として地域社会の関係構築、アクセシビリティの向上に係る活動をしているアーティストと面会し、多様性・公平性・包括性の保たれたコミュニティづくりのための活動や、演劇界の労働環境について話を聞いた。

ブロードウェイの制作現場の労働環境についてヒアリング

実際にブロードウェイの舞台に立っている日本人俳優に会い、俳優の労働環境について話を聞いた。フリーランスの俳優に交渉能力を持たせるためのユニオンの存在や、健全な労働環境のための業界の取り組みについてヒアリングした。

印象に残ったプログラム

Broadway Green Alliance オフィス訪問とインタビュー

多種多様な参加方法を用意し環境活動のハードルを下げる工夫に感銘を受けた。オフィスで花瓶、メトロカード、化粧品などを回収している他、約1,200人のグリーンキャプテン(ボランティア)にマニュアルを提供している。対話を通して個々の経験や状況を把握し、自信を持って続けられるようサポートをしている点が活動自体の持続可能性を高めていた。コロナ後に衛生面を考慮して使い捨て用品の消費が増えることを予測し、「より環境に優しい舞台の再スタート」を促すマニュアルを作成したことでより業界での認知度が上がった。個人からカンパニー、そして業界全体へと活動の規模が広がっていくポテンシャルを感じた。



Broadway Green Allianceオフィスにて、バインダーを無料で借りることができるバインダープロジェクト

参加して

舞台業界における持続可能性についてのリサーチを目的に参加した。ベーシックプログラムではブロードウェイの全体像をつかみ、ユニオン(組合)によって各役職の労働環境が守られていることを学んだ。コロナ後にDEI(Diversity:多様性、Equity:公平性、Inclusion:包括性)の導入が加速した経緯や環境配慮にはまだ課題があることも様々な人たちにヒアリングする中で浮き彫りになった。オリジナル・プログラムではトップダウンだけでなく草の根レベルで環境活動やDEIの考え方を普及する人たちに会い、業界を超えたコミュニティの構築と教育の重要性を学んだ。今後の目標はDEIの学習、海外講師による安全な稽古場づくりのワークショップ開催、より環境に優しい舞台製作のマニュアルの日本語訳作成等である。



Green Alliance Officeにて



高田郁実
事業戦略・マーケティング

2014年、昭和音楽大学アートマネジメントコース入学、2018年同コース卒業。

2018年4月四季株式会社(劇団四季)に入社、東京営業部での研修後、経営企画部に本配属。2024年2月現在、経営企画部企画・マーケティング課 係長として、中長期経営計画の策定、ITマーケティング施策の推進、市場調査の実施、会員組織戦略の策定などを担当。

オリジナル・プログラム

ブロードウェイ最大手の チケットングサイトにヒアリング

ブロードウェイ最大級のチケット・エージェンシー、Broadway.comのオフィスを訪問。共同CEOと面会し、最大手となっているチケットングサイトのビジネス面及びシステム面での運用についてヒアリングを実施した。

ニューヨーク在住 演劇ジャーナリストと面会

NYで演劇ジャーナリストをしている日本人と面会。ブロードウェイの直近の動向についてヒアリングし、作品制作の過程、劇場主・チケットサイト・観客の関係性のことなど、ジャーナリストの視点から解説してもらった。

ブロードウェイの劇場を視察

“The Book of Mormon”, “Hadestown”, “Madame Butterfly”, “Back to the Future: The Musical”などを個別に観劇。会場運営や客層、観客の取り込みなど日本との違いを視察した。

印象に残ったプログラム

ブロードウェイの チケットングシステムについてリサーチ

Broadway.comを訪問し、ブロードウェイ最大手となっているチケットングサイトの運用やダイナミックプライシングによるビジネスへの影響についてヒアリングを実施。

日本でBroadway.comのようなビジネス(公式サイトで販売している座席に手数料を乗せることで売上を立てるビジネス)を実現することは「転売」に関する日本での法規制の観点から難しい可能性が高いが、東京都内の公演を「1つのサイトで現在上演中の作品が確認できる」、「座席の購入まで可能」、「初心者に分かりやすいサイト」の実現は今後も検討すべき業界の課題であると感じた。

参加して

私達はコロナ禍において、エンターテインメントは「不要不急」と区分されてしまうという事実を突きつけられた。2020年～21年にかけて従来通りの公演活動が実施できない中で、活動を休止してしまった団体や廃業してしまった業界関連企業が多く存在した。今後、同様の事態に苛まれた際に同じ現象が起きないように、ブロードウェイのようなビジネス面での体力が必要と考え、学びを得るために今回の派遣プログラムを志望した。

まずは都内で主な活動を実施している演劇団体の一員として、今回の学びから取り入れるべきものは早急に取り入れ、引き続きこの経験・知見を多くの方と共有し、業界全体で課題に取り組むことができる環境創りに努めていく。また今回の派遣でお会いした方々との関係性も引き続き繋ぎ止めながら、今後の活動に活かすことができればと思う。



Back to the Future The Musical会場内の様子



Broadway.comオフィスにて



目澤 芙裕子
プロデューサー、マネージャー、制作

幼少期にヨーロッパで育ち、ダンスを通してコミュニケーションが取れることを知る。桜美林大学でコンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事し、本格的に舞台の世界に踏み込む。ダンスカンパニーBaobabとゴーチ・ブラザーズに所属し、国際的な視野を持ちながら、演劇とダンスの経験を活かしたマネジメントプロデューサーを目指す。

オリジナル・プログラム

国際的なネットワーキングの場に参加

100か国以上から1400人を超えるフェスティバルマネージャーが集まり、世界的なネットワーキングを目的とするFestival Academy New Yorkの1週間のプログラムAtelierに参加した。

メトロポリタン美術館を訪問

世界三大美術館の1つ、メトロポリタン美術館を視察。広大な展示スペースに展示される家具、楽器、歴史的な重要文化財など多様なジャンルに及ぶ世界最大級のコレクションを鑑賞した。



メトロポリタン美術館館内の様子

印象的な観劇体験

Under the Raderフェスティバル演目、「THE BLACK CIRCUS OF THE REPUBLIC OF BANTU」を観劇。アフリカの人々が受けてきた感覚を観客に疑似体験させる演出で、アフリカのバントゥー共和国の歴史背景を題材にしたソロ作品を鑑賞した。

印象に残ったプログラム

“MJ The Musical”鑑賞

マイケル・ジャクソンの半生を描いたミュージカル「MJ The Musical」。マイケルを演じる俳優は、YouTubeのそっくりさんから選出したというので驚きだが、その決断をしたプロデュースワークの挑戦が素晴らしい。鑑賞回の主役はアンダースタディだったが、強いエネルギーと表現力には脱帽で、作品のライブ感を生み出していた。公演中止が続く日本においては、アンダースタディやスイングの重要性を見直していくことが重要だ。また、作品を大きく盛り上げていたのが、立体音響スピーカーから流れる重低音のど迫力音楽と、サプライズをふんだんに盛り込み変化する舞台美術で、舞台の境界線を飛び越えてくる衝撃を受けた。



MJ The Musical

参加して

ブロードウェイにおけるショービジネスの知見は非常に参考になり、マーケティングやファンレイズ、PRなど作品以外の部分の重要性を改めて見出した。また、ブロードウェイやアートフェスに関わらず、人種や性別など多様性に焦点を当てた作品の多さが印象的だった。先進都市ニューヨークだからこそそのダイバーシティへの危機感も感じ、大都市東京で文化メディアを扱う者として、身が引き締まる思いだった。今後、ダンスを軸にノンバーバル表現を用いたエンターテインメント、アートコンテンツを日本から創造、展開し世界へ繋げていくことを自分のミッションと認識し、それを実現していく力をつけたいという野心を強く抱く研修になった。

総括—今後に向けて

初年度の今年は3か国に10名を無事派遣することができ、短い期間ではあったが、各人にとって大きな刺激となったようだ。また、自己を改めて見つめなおし、自分の進むべき方向性や向き合うべき課題を自覚する機会になったという意見もあった。現在、円安等もあり、日本の芸術団体、特に若手が海外での活動にチャレンジすることも少なくなっており、グローバルな活動が脆弱化してきている。その意味でも、被派遣者が海外で様々な知見や経験を得る機会を提供できたことは、大きな成果といえる。

今回この新しい事業をわかりやすく訴求するという意味で、歴史もあり知名度も高いエディンバラ・フェスティバルからスタートできたのは幸いであった。なお、派遣先でのプログラムについては、アドバイザーからのアドバイスで組み立てた必ず履修してもらうベーシック・プログラムと、各被派遣者が自らの問題意識で構成するオリジナル・プログラムの2種類で構成することで、アドバイザー・主催者が意図する部分と、参加者が期待する部分を比較的バランスよく取り入れることができた。ベーシック・プログラムについては、各回ともアドバイザーの多大なるご協力があった充実したプログラムを展開することができた。またオリジナル・プログラムについてもそれぞれが明確な課題意識をもち、積極的にネゴシエーションを重ね、密度の濃い内容となった。

課題としての広報・周知

今回の課題としては、広報・周知があげられる。スケジュール的に十分な期間がとれなかったということもあるが、演劇についてはフリーの若手ディレクター・プロデューサーなどのプラットフォームも多く比較的募集をかけやすかった一方で、美術については、対象となる若手キュレーター等への周知に課題が残った。次年度以降はより広範に事業の周知を積極的に展開する必要がある。

派遣プログラム展開の可能性

今後将来的には、派遣先として、音楽などの幅広い芸術分野を取り込むことはもちろん、毎年継続的に同じフェスティバルに派遣するといったことや、「芸術におけるアクセシビリティ」や「芸術と環境問題・気候変動」、「社会的分断と芸術」、「芸術分野の労働環境」など、今日的な課題をテーマとした組み立てなども検討する余地があろう。

さらに対象者として、初年度は若手中心であったが、申請状況からも即戦力となる中堅人材の派遣や、さらには個人ではなく団体のフェスティバルへの派遣といったこ

とも視野に入れるなど、東京の芸術関係者の海外とのつながりをバランスよく拡大していくことも重要であろう。

成果の共有と広がり

派遣の成果を活かすためのフォローアップとして、今回の経験を経て掘り下げられた被派遣者の問題意識や新しい活動に、アーツカウンシル東京がどのように並走できるかといったことも、課題として挙げられる。あわせて、彼らの知見をどう蓄積し、他の人々にも共有していくか、派遣先とのネットワークの在り方や連携の在り方も検討していくべき課題である。

初年度の3つの派遣プログラムを終え成果も実感したが、今後、派遣先、派遣プログラムのバリエーションの展開や、成果の共有、ネットワークの拡大など、継続的に事業の実績を積み上げていき、国際芸術文化都市東京の基盤強化、国際的なハブ機能の強化につなげていくことが肝要である。

最後に今回の派遣プログラムへのアドバイスや現地との調整など、多大なご尽力をいただいたブリティッシュ・カウンシル須藤アーツ部長、森美術館片岡館長、そして(株)スタオベ松田代表、また事業全般にアドバイスいただいたセゾン文化財団片山理事長には、心より感謝申しあげたい。

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京



「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」
2023年度実施報告書

2024年3月発行

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
 報告書作成 アーツカウンシル東京活動支援部助成課支援デザイン担当
 (石綿祐子、角南晴久、結城直子、澤田伸之、細田梨穂)
 報告書編集 増田啓之(TARO inc.)

- 本書は「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」2023年度の実施内容に基づき制作・編集されたものです。
- 掲載された画像等につきましては、無断の転載をお断りします。
- 掲載された人物の敬称は省略させて頂いております。



